

# Berlin—Tôkyô im 19. und 20. Jahrhundert

Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin

## 東京・ベルリン

十九世紀～二十世紀における両都市の関係

ヴォルフガング・ブレン／マリー＝ルイーゼ・ゲールケ 共編  
ベルリン日独センター発行  
シュプリングァー・フェアラク 出版  
1997 年刊

福原 嘉一郎

東西ドイツの統一が成って、すなわち嘗ての大ベルリン市が復活して4年目に、大東京と大ベルリンが姉妹都市宣言をおこなった。その2カ月足らず後に東京の新宿区とベルリンのティアーガルテン区とが姉妹区となった。どちらが姉か妹か問わない友好提携 (Freundschaftsvereinbarung) というのだそうだが、私は迂闊にもそのような関係宣言がなされたことを、本書によるまで全く気づかなかった。多くの都民、そして新宿区民もやはり知っていないのではないか。それは知らずとも、東京とベルリンが日本とドイツ両帝国の首都として浅からぬ因縁をもってきたことは誰しも知るところである。この両都市の1860年代から現在に至るまでの関係史を、四つの章に分けて、28人の筆者と二つの機関が重複や持ち分の逸脱などを恐れず、自由に書き綴ったのが本書である。本文はすべて各ページ毎に日独語の対訳、四百数十ページに及ぶ大編であるが、恐らくは独文学関係者にとっては手にする機会があまり多くはないと思えるので、その内容と構成などについて少々紹介をしておこうと思う。この一文はしたがって書評というより大部分において紹介と一部私的感想でしかない。姉妹都市宣言記念出版としての本書の求めるところも、およそその辺りに留まるものと考えてよかろう。

巻頭の都知事青島と市長ディープゲンの「祝辞」に続き、第1章「1860年代から1880年代まで」、第2章「19世紀から20世紀への変り目」、第3章「二度の世界大戦」、第4章「そして1945年以降」という章分けはほぼ通史的記述で一貫しているごとく見えるが、編者の一人ゲールケ自ら言うように、執筆者たちのさまざまで自由な視角を通じて多彩な両都市の姿を描き出すべく、年代を追った記述の枠を超え、あるいはそれを中断しつつ、政治的テーマから社会的、経済的また思想的、芸術的テーマが、かなり恣意的に列挙され、編纂されているという感がある。

第1章冒頭のゲールケの記述は簡略日本史教科書の明治維新の記述として読むことがで

きるはなはだ明快な文章であり、「近代化」時代の日本の医学、法律（殊に憲法）の分野における日独関係について要領よき理解を提示している。改めて我々の三四世代を溯る先人たちの奮励を思わされること切なる記述である。岩倉遣外使節団、森鷗外、井上哲太郎等最も早い時期に渡独した人々の意気込みと機縁とが19世紀末近く、日独交流の文化的証しとしての和独会という形に結集しベルリンに結成された。東京ではそれより数年早く滞日ドイツ人によって東洋文化研究所(OAG)が設立された。その双方の成り立ちと構成が既にして両国民の思い入れと意気込みの違いをあらわして面白(G.ハーシュ)。

帝国陸軍草創期から第一次大戦までの両国軍の親近関係にもかなりのページが割かれ、乃木をドイツ皇帝に紹介する明治天皇の書簡などが公開されている(H.=E.マウル)。日清・日露両戦役における日本の勝利をわが弟の勝利のごとく見つつもやがて三国干渉や青島占領など極東に野心をみせ始めたドイツの国情を、再びゲールケ女史は明快に解説してみせる。このベルリン自由大学出身のヤパノローギンの精力的な日独関係史の記述は日本人のかなり微妙な心理にまで目を配り、また注記も詳細で好感のもてる文章である。彼女は3章・4章においてもそれぞれの冒頭に総括的な記述をおこなっており、通してその文章は東京とベルリンというより日独関係史の教科書たり得るだろう。

このような記念誌としては両都市の構造比較なども欲しいところだが、その意味では正井泰夫の江戸から明治への東京土地利用状況変化の記述と、平井正の地下鉄を中心とする旧都ロンドン・パリに対して高架線を中心に新興都市として急速な進展を遂げた東京・ベルリンの対比は興味深いものがあると同時に、別して第二次大戦後、路線の上でも経営上も複雑に交錯する東京の地下鉄に不便を感じながらも、分断されなかったこの大都市の幸運を改めて思わされる。他に都市構造比較のテーマは全体的に記述が少ない。巻末に近く「都市発展の比較」(W.フリヒター)と「首都圏計画」(田山輝明)の二文が言及しているのみである。後者は早大教授による戦後東京についての経過と計画展望である。前者の如く両都市の面積・人口密度などを単純に比較しても意味はなからうし、今後の首都ベルリンは未だ動き出そうとしているだけであるので、我々にとっては繁華であったベルリンの過去が数葉の写真によって関心呼び起こされるのみである。東京は周辺都市(衛星都市)が失われ、都心と副都心へ向かう集中とそこからの放射の路線があるのみで、郊外を喪失してしまった。ベルリンがもし、フリヒターの言うように、今後の発展に東京の大都市化を手本と見るなら、現状から見て相当の覚悟が必要とならう。

今世紀初頭に古河財閥とジーマンスが提携し、それぞれの頭文字をとった „fusi“ から今日の富士電機・富士通の名が始まっていることなど、一般的には知ったからとてどういふものでもないが、なんとなく近代化初期の発展途上の日本が見えて微笑ましい。

1910年代から20年代、つまり第一次大戦中戦後の東京が表現主義乃至ダダの感覚を取り込んだのは必ずしもドイツの影響のみとは言えなからうが、戦争とは別の感覚で日本がヨーロッパと近親の感を強めた時代であり、大正モダニズムは戦勝側(英仏)、敗戦側(独伊)を問わずヨーロッパによる近代化の波が日本を洗った一刻だった。比べて第二次大戦は日本をヨーロッパから切り離し、いわゆるアメリカナイズという結果を齎した。思えば

今世紀前半は欧から、後半は米から日本は近代化の道筋を学んだわけだ。ともあれ本書全般を通じて両国両都市の芸術交流は他の分野に比してかなり詳細に記されている中でも、三十ページに及ぶTh. ライムスの舞台芸術と映画に関する記述は、注記・参考文献の呈示も詳細で、第4章の第二次大戦後の交流を述べた同じ筆者の「華麗な叙事的演劇」と共に、ともすれば見落されがちな日本人によるドイツ・ベルリンにおける演劇活動にも焦点を合わせて記されている。そもそもこの方面では日本の伝統芸能紹介の意味合いが強く、東京からベルリンに先端芸術が進出するのは戦後も80年代を俟つことになる。20世紀初頭の川上貞奴・音二郎、あるいはハナコらによる日本演劇公演は恐らく興行成績を狙ったキッシュだったろうが、生真面目なドイツ演劇界は当時の自然主義・写実主義の行き詰まり状態脱却のために、主として日本的舞台構造などに極めて真剣な眼差しを向けた如くである。ドイツ演劇の我が国への導入については格別目新しい記述をここには見出し得ない。有楽座・帝劇、そして築地小劇場の開設以後の「新劇」の活動は既によく知られる所である。昭和初期に渡独した石井漠・小浪夫妻、江口隆哉・宮操子、榎茂都陸平、青山圭男などの舞踊家たちの主たる目的は勿論彼地の舞踏芸術の摂取にあったのだが、現地公演の機会にも恵まれた。日独合作の映画は同一映画の題名が「新しき土」(日)と「Die Tochter des Samurai」(独)と異なる如く、双方の思惑もちぐはぐなものであったらしい。日独枢軸の蜜月においてもこのような齟齬は避けられなかったようだ。

二つの大戦の戦間期についてゲールケは、ドイツのワイマール共和国と日本の大正デモクラシーの間に、後者が君主制構造に深く根差している点で本質的な差があるとしながらも、時代の内政状況は東京とベルリンで著しく似通っていたと指摘している。つまり左翼・右翼両勢力の抬頭とその運動の過激化の中で自由を求める大衆の文化活動の多様化・多彩化がみられ、ダダ、表現主義、エロ・グロ・ナンセンスの流行、プロレタリア的啓蒙運動などの中に、ある程度の共通項が見出せるということであろう。一次大戦後までを通じ、友好と競争という関係が両国の間に一貫してあったのだ。通商的には断絶されていた一次大戦中にも日本の技術的水準は向上し、やがて敗戦国として経済的に苦しむドイツに対し日本から学術援助資金が流れる時代が短期間だがやってくる。アインシュタインを初め駐日大使ゾルフや物理学者ハーバーらの努力が実って、日本の対独経済的ボイコットが解かれ、日本の政治家・企業家から多額の資金がドイツ学術窮状互助会(die Notgemeinschaft der deutschen Wissenschaft)のために提供されることになった。これら資金の一部が核分裂の研究にも当てられたということ(E. フリーゼ)には、その研究成果が二十数年の後にめぐりめぐってとんでもない結果を日本に齎すことになるやり切れないような歴史の皮肉を改めて見せつけられる思いがする。

ナチ抬頭と満州事変はほぼ時期を同じくし、やがて「戦略的プロパガンダ」に乗った友好的文化活動展開の時代となる。ヒトラーユーゲントの来訪、ゲッベルス、フォン・リッベントロップなどの名がわたし自身の幼い記憶から消え去っていない。しかしその幼い記憶によって今にして思うと、日本では民族的にまた伝統文化的にドイツの受容乃至それとの同一化を推進する方向には向かわず、ただドイツの実際的思想統一だけを学ぼうとして

いたのではないか。むしろドイツの方が日本の精神文化・宗教・日常作法・武道などに積極的に熱い目を注いでいたのではないかと思わせる節がある。東方を憧れるドイツの感情がエキゾチズムと神秘性の中に東方の同盟国の精神的要素に共感と敬意をもったようだ。大弓を引くドイツ人の写真にオイゲン・ヘリゲルの弓道への思い入れが想起された。

1940年代、東京ベルリン・日独文化協定の下でいくつかの日本人を題材とした演劇がドイツ人によって上演されたのに対し、日本ではドイツ作品の上演が皆無であったという指摘(Th. ライムス)に対しては、日本では大和魂と並ぶゲルマン魂・プロイセン根性を特に強く訴える必要性を感じなかったのだと応じてよいだろうか。40年代前半の日本にはユダヤ民族排斥の機運は一部で充分強いものがあつたが、特に日本人をアーリア人とみなそうとする動きは全くなかつたろう。一方のドイツでは日本人の優秀性を承認するべくアーリア人に近づけようとする努力があつたらしい。日本でもアーリア人の優秀性は承認されたが、日本人であるが故に劣等と見なされることには極めて強い抵抗があつた。つまり日本人は大和魂だけで充分優れた民族と思込んでいたのである。ドイツ人に有色人種拒否があり、日本人に白人に対する優越感が植え付けられて、その上で民族友好が唱えられたわけだから、実態とプロパガンダとの噛み合わせの悪さは、さまざまな体験の半世紀余を隔てて、もはや想像の世界で捉えるしかなくなっている。

前後するが、この時代に比べれば、村山知義らの学んだ1922年ははるかに捉え易い。ワイマール憲法が制定されて間もなく高額の賠償金とインフレに苦しむ中で、筆者の尾崎眞人の言葉で言えば、ベルリンはアヴァンギャルドの十字路にあつて、若い日本の学徒に猛烈に意識改革を迫つたのであつた。帰国後の村山の芸術活動、プロレタリア運動そして転向、それらのすべてを22年のベルリンが内包して彼に提供したのだ。

H. ヴァルラーヴェンスがベルリンと日本美術の幾つかの出会いを記述している。O. キュンメル、E. グロッセらの精力的な美術工芸品蒐集で20年代には相当なコレクションが成り立っていたようである。ついでF. ルンプ、C. グラーザー、F. ティコティンらが先述の日本精神文化受容とはいくらか趣を異にした所で日本美術の蒐集と研究に当たっていたらしい。その結果桑原節子の報じる1930年代における二つの重要な日本美術の展覧会(31年2月の「現代日本画展」と39年3月の「日本古美術展」)が開催されるまでになつたのである。前者は当時の帝展・院展所属の日本画家141人によるデモンストレーションであり、26年ベルリンに設置された日本研究所が大きくかかわつたとされる。後者は既に日独伊の枢軸ができあがつた直後のことであり、ヒトラーもこの機会にベルリン美術館所蔵(キュンメル蒐集)の嵯峨天皇肖像の返還を申し出るなど親善の証しとしての役割をも果たした。この展示は帰還後に上野の帝室博物館で帰国展が催され、前後した「アジア復興レオナルド・ダ・ヴィンチ展」と共にかすかな記憶が私にもある。

ワイマール共和国初代駐日大使 W. ゴルフについての A. ハックの文章には胸の痛くなるものがある。筆者は当時の独日協会事務局長の甥の娘で、豊富な個人的資料によって、健全な人々にとって住みにくくなってゆく日独両国の状況を浮かび上がらせる。後年反ナチ的行動によって捕らえられたゴルフ夫人の裁判延期と助命に日本大使館の働きかけが有

効であったのがせめての救いというべきか。総じてこの時代ベルリンの独日協会は在独日本人の権益を守る努力と文化的接触を深める努力を惜しまなかったようであるが、東京の日独協会及び日独文化協会の活動について日本側での記述は殆どない。本来第4章で語られるべき1952年敗戦後の国交回復後の活動が第3章にある(日独協会出版広報委員会)だけなのは何かを意味しているのだろうか。

古都ローマと新都ベルリン及び東京の枢軸を結ぶ雑誌の発行や、本書に語られてはいないが古代ローマの栄耀復活、ベルリンの大ゲルマニア構想そして海底と大陸を横断する東京ベルリン間弾丸列車の構想など今にしてみれば夢中の夢が見られていたわけだが、学術文化の面では時代に合わせた人的交流だけは確実に続いていたのがG. クレープスの記述で分かる。

さていよいよ終章45年以降であるが、やはりゲールケ女史が初めに総括する。「ベルリン物語」「ドイツ零年」の時代から90年の統一まで、ベルリンの歴史は壁の構築から崩壊まで今やあまりに多く語られて殆ど関心を喚ばないくらいである。大空輸も今は昔語り、むしろ政治的には53年6月17日ソ連軍の介入、63年のケネディ来訪などが記憶の底から蘇る。60年代から70年代に至る経済復興と学生運動は東京とベルリンであまりにも似ている。そして統一後のドイツ、バブルはじけて後の平成日本も同じく低迷の中にいる。H.=D. イェーガー元駐日東独大使による戦後DDRと東京との交渉の記述は、73年の国交樹立前の経済的・文化的交流と樹立後の政治的交流の図を描き出す。日本DDR友好協会の記述の中で大塚金之助に触れていて、私が先年(77年)初めてベルリンを訪ねた折に、フンボルト大学に隣接する(東独)国立図書館の一角に日本の大塚教授から贈られた図書のコナーがあって、多少日本語の分かる館員が嬉々として整理に当たっていたのが思い出された。Th. ライムスの戦後両都市の演劇的關係についての記述の中に興味をひく表現がある。東西両ベルリンで歌舞伎・能・狂言・文楽人形などで同じレパートリーが上演されているが、それが同一回の海外公演で前後して行われたことは一度もなかった、つまり必ず何年かの間をおいた別々の機会だったということ、そして東独の演劇学と日本学はこれらの公演を西洋のカテゴリーに学術的に分類する努力をしたが、西側では音楽民族学以外そのような努力が全く見られなかったということである。政治的な理由から、69年まで東では関心をもちつつも日本の伝統芸能の実物に接する機会がなく、学術的研究と翻訳に積極的に取り組んだのがその理由かも知れない。一方西では80年代後半以後著しく日本の前衛芸術を受容する傾向が強まり、この傾向は映画でも同様だったようだ。これは現在東京においてベルリン乃至ドイツが他のヨーロッパ諸国と文化的に等価値、等レベルで捉えられる傾向と共通しているのかもしれない。G. フリードリッヒの報じる1993年のベルリンオペラ東京公演に於ける感動は87年の「ニーベルングの指輪」四部作の連続線上のもの、一般的には手が届きにくくなってごく狭い一部でしか感動を呼び得ない状況ができあがってしまっている。東京ではヨーロッパの伝統芸能にエキゾティズムよりキャピタリズムを感じるようになって、残念ながらもう久しいのである。

最後に教育交流。在外国の母国人子女教育の問題は特に日本人の場合、ドイツに限らず

滞在期間が短いという問題もあって、困難な問題を抱えている。日本におけるドイツ学園は歴史も長く成功している例といえるだろう。ドイツでは中等教育に日本語を選択科目で導入し、日本では高等教育の段階で導入している。その結果ドイツの大学で日本語を学ぶ学生は数百人に対し、日本の大学でドイツ語を学ぶ学生は10万を遙かに超えていたが、知られるごとく最近では著しく減少傾向にある。大学における教育の基礎がヨーロッパに根差している以上この漸減現象はなんとかして喰い止めねばならない。それとも今後ドイツ語は古典語の役割しか果たし得なくなるのだろうか。

ベルリンの著名三大学と東京の東海・帝京・上智等の各大学との交流図に早稲田が加わっていないのはやや残念な気がするが、「東西ドイツの統一により…再びベルリンと東京の地が日独の学術分野での交流の要となるための布石が敷かれた」のだから今後に期待しよう。巻末に近く20世紀初頭のアレクサンダー広場、フリードリッヒシュトラッセ駅、戦間期のポツダム広場などの写真が見られるが、特に後者は分断ベルリンのシンボルから解放され、現在ソニーを初め復興の建設が進められているので、21世紀初頭のベルリンの街への期待を抱きつつこの書を閉じることができるであろう。

目 次	Inhalt
祝詞 青島幸男	01 Grußwort <b>Aoshima Yukio</b>
祝詞 エーバハルト・ディーブゲン	03 Grußwort <b>Eberhard Dieppen</b>
友好都市共同宣言	05 Gemeinsame Erklärung über die Begründung einer Städtepartnerschaft zwischen Berlin und Tôkyô
第1章 1860年代から1880年代まで	KAPITEL I <b>Die 60er bis 80er Jahre des 19. Jahrhunderts</b>
1860年代から1880年代まで マリー＝ルイーゼ・ゲールケ	07 Die 60er bis 80er Jahre des 19. Jahrhunderts <b>Marie-Luise Goerke</b>
誕生から1868年までの東京 ウルリッヒ・ワッテンベルク	43 Tôkyô von den Anfängen bis 1868 <b>Ulrich Wattenberg</b>
明治時代における東京の土地利用変化	51 Die Veränderung der Flächennutzung in Tôkyô während der Meiji-Zeit <b>Masai Yasuo</b>
正井泰夫 ベルリンを訪れた岩倉遣外使節団	61 Die Iwakura-Mission in Berlin <b>Ulrich Wattenberg</b>
ウルリッヒ・ワッテンベルク ベルリン時代の森鷗外	71 Mori Ôgai in Berlin <b>Heike Schöche</b>
ハイケ・ショッヘ ベルリン独日協会の前身としての和独会 (1888年～1912年)	79 Die Wa-Doku-Kai (1888-1912) als Vorläuferin der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Berlin <b>Günther Haasch</b>
ギュンタ・ハーシュ	

軍事関係 ハインツ＝エーバハルト・マウル	83	Militärische Beziehungen <b>Heinz-Eberhard Maul</b>
第2章		
19世紀から20世紀への変り目		
19世紀から20世紀への変り目 マリー＝ルイーゼ・ゲールケ	91	Jahrhundertwende <b>Marie-Luise Goerke</b>
高架か地下か 東京・ベルリン——Sバーン・環状線物語 平井 正	117	Hochbahn oder Untergrundbahn? S-Bahn und Ringbahn in Berlin und Tōkyō <b>Hirai Tadashi</b>
堀立小屋のロマンと高層ビルの街 東京(1910年～1936年) エックハルト・モンバー	125	Budenzauber mit Wolkenkratzer: Tōkyō im Blickfang Berlins (1910-1936) <b>Eckhardt Momber</b>
フリッツ・ルンブ	137	Fritz Rumpf: ein Berliner Bohémien unter japanischen Pan-Jüngern <b>Peter Pörtner</b>
「パンの會」のベルリン出身ボヘミアン ペーター・ベルトナー	145	Die Tōkyōter Holzschnitt-Ausstellung <i>Der Sturm</i> von 1914 <b>Fujii Hisae</b>
「DER STURM 木版畫展覧會」について 1914年、東京 藤井久栄	153	Von der Schwermut des Nichtverstehens: Berlin— Tōkyō und die Darstellenden Künste <b>Thomas Leims</b>
不可解の憂鬱から 東京とベルリン、そして舞台芸術 トーマス・ライムス	183	Die Berliner Siemens-Werke in Tōkyō <b>Frank Wittendorfer</b>
東京に設立されたベルリン企業シーメンス社 フランク・ヴィッテンドルファー		
第3章		
二度の世界大戦		
二度の世界大戦 マリー＝ルイーゼ・ゲールケ	193	Zwei Weltkriege <b>Marie-Luise Goerke</b>
「我々には精神文化の交流が必要だ」 エーバハルト・フリーゼ	233	„Wir brauchen den Austausch geistiger Güter!“ <b>Eberhard Friese</b>
ベルリン独日協会に反映される日独関係史	245	Die Geschichte der Deutsch-Japanischen Beziehungen im Spiegel der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Berlin <b>Günther Haasch</b>
ギユンタ・ハーシュ	253	45 Jahre Japanisch-Deutsche Gesellschaft Tōkyō JDG. Ausschuß für Öffentlichkeitsarbeit
勸日独協会45年の歩み	265	Unsterbliche Kunstgeschichte: Berlin-Tōkyō Die Drehbühnen für Murayama Tomoyoshis avantgardistische Kunst <b>Ozaki Masato</b>
勸日独協会出版広報委員会		
美術史が終焉しかねる時		
東京・ベルリンを廻り舞台にした 村山知義のアヴァンギャルド 尾崎眞人	273	Japanische Kunst in Berlin <b>Hartmut Walravens</b>
ベルリンの日本美術	283	Zwei bedeutende Ausstellungen japanischer Kunst in den 30er Jahren dieses Jahrhunderts <b>Kuwabara Setsuko</b>
ハルトムート・ヴァルラーヴェンス		
1930年代に開催された日本美術の 二つの重要な展覧會について 桑原節子		

ヴィルヘルム・ゾルフ大使と ナチ初期時代の東京とベルリン アネッテ・ハック	293	Botschafter Wilhelm Solf und die ersten Jahre der Nazizeit in Berlin und Tōkyō <b>Annette Hack</b>
ベルリン・東京・ローマ (1933~1945) ゲルハルト・クレープス	307	Berlin-Tōkyō-Rom (1933-1945) <b>Gerhard Krebs</b>
第4章		
そして1945年以降		
そして1945年以降	315	Nach 1945...
マリー=ルイーゼ・ゲールケ		<b>Marie-Luise Goerke</b>
日本と東ベルリン	339	Japan und Ostberlin
ハンス=ディーター・イエーガ		<b>Hans-Dieter Jäger</b>
ベルリン日独センター	343	Das Japanisch-Deutsche Zentrum Berlin
ティエロ・グラフ=ブロックドルフ		<b>Thilo Graf Brockdorff</b>
華麗な叙事的演劇	349	Epische Theaterpracht:
1945年から今日にいたる		Die theatralischen Beziehungen
演劇における東京とベルリンの関係		zwischen Berlin und Tōkyō von 1945 bis heute
トーマス・ライムス		<b>Thomas Leims</b>
ベルリン・ドイツオペラ——1993年度東京公演	369	Die Deutsche Oper Berlin in Tōkyō 1993
ゲッツ・フリードリヒ		<b>Götz Friedrich</b>
教育における東京とベルリンの交流	375	Wechselbeziehungen Berlin—Tōkyō im Bildungsbereich
ギンター・ハーシュ		<b>Günther Haasch</b>
東京とベルリンの大学間交流	389	Universitätsbeziehungen zwischen Berlin und Tōkyō
アストリット・ブロッホロース&ハネローレ・ヘーゲル		<b>Astrid Brochlos, Hannelore Hegel</b>
東京とベルリン——都市発展の比較	393	Berlin und Tōkyō: Stadtentwicklung im Vergleich
ヴィンフリート・フリュヒター		<b>Winfried Flüchter</b>
東京の首都圏計画	415	Die Hauptstadtplanung für den Großraum Tōkyō
田山輝明		<b>Tayama Teruaki</b>
ソニーとベルリンの今までの歩み	423	Sony und Berlin
(葡)ソニー・ベルリン		Sony Berlin GmbH
新宿区とティアールガルテン区の	427	Grundlagen und Gedanken zur Partnerschaft
友好提携のための基礎と今後の見解		zwischen Tiergarten und Shinjuku
ヴォルフガング・ナウヨカト		<b>Wolfgang Naujokat</b>
新宿区とティアールガルテン区との	429	Freundschaftsvereinbarung zwischen Tiergarten
友好提携について		und Shinjuku
小野田隆		<b>Onoda Takashi</b>
21世紀へ向かう東京とベルリン	429	Berlin und Tōkyō auf dem Weg ins 21. Jahr- hundert
エッツアルト・ロイター		<b>Edzard Reuter</b>